Japanese Literature

# 日本研究
# 創作

芸術文化学部

# 学科

日本文学科長
**灰谷　謙二**

世界が複雑多様で目まぐるしく変わる状況のなかで、課題を解決し対応できる力が問われるようになりました。ビジネスの世界でのコンピテンシー（資質・能力）は優れたパフォーマンスを示す行動傾向としてモデル化が重要視されるようになった概念ですが、教育の世界では、【知識・技能】・【思考力・判断力・表現力】・【主体性、学びに向かう力や態度、人間性】といったかたちで整理され、新しい学力観として示され運用されています。この3つの分野は人間の力のあらゆる面にかかわる力ですが、それを成り立たせる基盤になる、それが求められる典型的で基本的なものが言語運用能力だというのは間違いないでしょう。

その芸術的表現としての文学も含めた言語活動は、物理的な身体運動、語彙や文法、文化的背景のような、社会基盤・ツールとしての知識・技能にかかわる面と、それをもちいて論理的な思考、表現と理解をおこなうという汎用的な運用能力が必要です。しかし、その大前提になり、言語活動を成り立たせるものは、自分をとりまく相手と社会に関わり切り結ぼうとする意欲だといえます。ことばで表現することは、多様な価値観、異質なものを受け容れ発していく主体的な態度なしには成り立ちません。文学という言語芸術も、それを成り立たせる言語そのものも、本来このような総合的な能力・資質を必要とします。そしてそれは、基本的で根源的であるがゆえに、とても難しいことで、なかなか思うようには実現できるものではないことは皆さんも経験してきてよくわかることだと思います。

自分とは違うなにか、わからないもの知らないものと向き合おうとする好奇心とそれを解決する営みをだれかに伝え表現すること、またそれを理解しようとするときに、人は孤独ではいられませんし、その世界は広く尽きることがありません。日本文学科でそのたのしさに触れ、勇気をもってこの言葉の世界に踏み出していきましょう。

## 日本文学科の入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

日本文学科では、豊かな人間性と幅広い視野、高度な言語運用能力をもとに諸共同体のリーダー・教育者・創作者等として主体的に社会に貢献できる人の育成を目指しています。自らの力でテキストの精読や実地調査に基づく分析を行い、他者との議論や対話を通して言語文化の探究と創造に取り組む活動に重点をおいた教育を展開します。

このような教育理念・目的に基づき、日本文学科は次のような人を求めています。

- ・高等学校等までの教育課程において確かな国語の力を身につけた人
- ・問いをもって対象に向き合い、論理的に思考し判断する力を鍛えてきた人
- ・知的探究心をもって日本語・日本文学を深く研究していく意欲がある人
- ・文学作品のもつ多様な価値観を柔軟に受け止められる人
- ・読解力・表現力・対話力を活用して協働的に社会に参画する意欲がある人

詳細はこちら

## 日本文学科の授業

日本語学・日本文学・中国文学・欧米文学と、周辺領域である、民俗学・伝承文学・文芸創作・国語教育学等を専門教育科目とし、専門教育科目に発展的に関連・連携する、学部の特性を活かした学部共通科目、教養教育科目を配置しています。

自らの力で文学や言語についての資料を調査し、読み解き、それをもとに論理的に思考し、言語文化の探究と創造に取り組むために、議論や対話を重視した専門演習を配置します。これら言語文化の探究と創造の成果として、卒業論文・卒業制作を課しています。

豊かな人間性と幅広い視野をもって、高度な言語運用能力を発揮し、他者と議論や対話をおこなうための、少人数双方向教育を実施します。

学科紹介動画はこちら

## 授業紹介1

古典文学基礎演習
レポーター
**荒木　彪吾**
（日本文学科2年）

この古典文学基礎演習という授業では、くずし字を実際に解読し、語釈や現代語訳を作成して発表を行います。昨年は『源氏物語』の梗概書の一つである**『源氏小鏡』**という作品を取り扱いました。

この情報だけだと、楽しそうと思われる方もいらっしゃるでしょうが、この授業は私の知る限り最も**鬼畜**です。隔週で出るくずし字解読の課題、発表資料の作成、他の発表者へのフィードバック、最終課題に期末テストなど、こなすべきタスクは多量かつ多岐に渡ります。しかし課題の量の差はあれど、これらは日本文学科の授業における基礎基盤でもあります。

皆さんも藤川先生が出す愛情たっぷりの**無慈悲**な課題に屈さず頑張ってください。

発表資料への講師の書き込みの一部
「たしかに随所に鬼畜感が・・・」（藤川談）

## 授業紹介2

国語教育学専門演習
レポーター
**羽原　瑞季**
（日本文学科3年）

古文漢文、延いては国語科、文学の必要性が疑問視されがちな昨今において、価値のある国語の授業とは何か?国語教育学専門演習では、そんな**国語教育の命題**に向き合うことができます。

この授業では、前期に教科書の教材を読み深め、教育学の視点から児童生徒にどういった力を身につけさせることができるかを考える**『教材研究』**、後期に実際の教員による授業実践の論文を読み、その価値と改善点を考える**『授業実践分析』**を行います。自身で研究・分析したものを授業で発表し、発表を聞いた他受講生や教授と質疑応答をすることで、思いもよらない指摘や考え方に触れ、さらに自身の考えを深めていくことができます。

受講生は国語教育学以外の分野にも興味を持ち、他の専門演習も受講している人がほとんどです。そのため、受講生の専門分野、「国語科教育」に対する関心の方向性は人それぞれです。そうした考え方の異質な他者との意見交流は、思考を柔らかく多様化させてくれると実感しています。

## 授業紹介3

日本語学講義Ⅱ
レポーター
**檀上　志穂**
（日本文学科4年）

**現**代の日本語における音声言語について、講義とグループ発表を通して方言を中心に学びました。講義では、出雲方言が取り上げられ、出雲方言を日常的に使用されている方の音声を聞き、その音声を真似しながら発音の練習を行いました。

また、勧誘、疑問、応答などの表現について文法的な特徴を学びました。グループ発表では、都道府県ごと、地域ごとなどのグループに分かれて各履修者の身近な方言を取り上げ、調査や分析、発表資料の作成に取り組み、発表を行いました。発表の準備では、取り上げる表現に関して、先行研究の確認、今どのような使用状況であるかの調査、文例作成による用法の特徴の分析を行いました。

発表では、会話例の発音練習、発表で取り上げた内容を踏まえた練習問題に取り組むことにより、発表者だけでなく履修者全体で理解を深めました。講義、グループ発表を通して、特定の方言の観察から他方言や共通語との繋がりも学びました。

## 授業紹介4

近世文学ゼミ
レポーター
**野寺　菜月**
（2023年度卒業生）

**卒**業論文の執筆は4年次からですが、3年次の春にはゼミが始まるので、約2年間という長い時間をかけて、自分のテーマと向き合うことになります。私の場合は、近世文学に関する授業を経由して、江戸時代に刊行された「草双紙」というジャンルに興味を持ち、曲亭馬琴の『新編金瓶梅』という作品について分析しました。

毎回のゼミでは、1、2週間分の調査結果をレジュメにまとめて、進捗を報告します。短期間で成果を上げることは難しいですが、他のゼミ生から違う視点の意見をもらうことで、自分の考えを深めたり、新たな課題が見つかったりします。秋には、同じ古典文学領域を専攻する学生同士の発表会があるので、その準備も研究と並行して進めました。

大学は、自分の興味・関心のある分野について、専門的に学ぶことのできる場です。卒業論文の執筆は、そこから一歩飛躍して、自分なりの解釈を創出する楽しさを感じることができる時間だと思っています。

私は現在、広島県内の公立中学校で国語教員として働いています。担当学年は2学年ですが、1学年の授業ももっており、毎日忙しくも充実した日々です。また、吹奏楽部の副顧問として大学時代の、吹奏楽部に所属していた経験を活かし、生徒に楽器の吹き方を教えています。

私は幼少期から、中学校の国語教諭になりたいと考えていたため、教員免許を取得することができる尾道市立大学に入学しました。教育学部ではなく、日本文学科のある尾道市立大学を選んだのには理由があります。それは「文学の町尾道」でより専門的な国語に関する知識を得られると思ったからです。文学を学びながら教職を同時に学ぶことは大変でした。

それでも今、教員として働いている中で、尾道市立大学で学んでよかったと思う瞬間がたくさんあります。例えば、古文の授業をする際、生徒に崩し字を見せて興味付けを行います。また、近現代文学の授業をする際は大学の授業で学んだ知識をもとに教材研究を行い、生徒の興味関心を高めるような授業を作ります。

大学で、崩し字を読んだこと、近現代文学を学んだこと、尾道市立大学に通わなければどれも自ら経験しようとはしなかったでしょう。大学で学んだことはこれ以外にもたくさんあり、学んだ多くのことをあらゆる場面で、自らの教養として仕事に生かすことが出来るのです。

尾道市立大学の日本文学科で学んだからこそなれる「国語の先生」があると私は思います。そして、それは他の職業にも共通しています。尾道市立大学で豊かな知識と教養と経験を身に付け、尾道市立大学の日本文学科で学んだからこそなれる○○を目指してください。

福山市立大門中学校勤務
**瀬良　寧々**
（2022年度卒業生）

私は現在IT企業でディレクター職に就いています。1年目はWeb制作のディレクション、2年目はSNS運用とさまざまな経験ができる職場です。若手が多く、年次が上の方も考え方が柔軟で直近では生成AIの出現に合わせて社内ルールを作っていくなど、みんなが常に学び、動いている業界だと感じます。

私はITについてまったくの未経験でしたが、自分にとって興味のあるほうへ進んでいたら今の職を選んでいました。周りにはデザイナーやプログラマーなど異なる職種の方がいます。違うスキルや考え方に触れられることがとても楽しく感じます。大学時代に他学科の方の考え方を知りたくてボードゲームサークルを作ったことや色んな学科の講義を聴いていたことの延長線に今の仕事があるように思います。

ディレクター職で大切なのはコミュニケーション力です。またお客さまの前に出て話せるプログラマーは重要視されますし、どんな職についても相手の話を理解して、自分の意見を伝えられる能力は必要です。

どんな場所で自分の力をのばしてもいいと思います。ただ日本文学科で得た言語化力は一朝一夕で身につくものでは無いと思います。特にゼミにおいて、考えをうまく言葉にできない時でも言葉にしないといけない環境に身を置けたことが成長につながったと思います。大変なときも多くありましたが、背伸びすることで得るものがあると思います。

大学で学んだ知識が直接仕事に使える機会は少ないかもしれません。しかし私の会社には色んな経歴のディレクターがいて、未経験のプログラマーも活躍しています。「その会社」の「その仕事」で使える特有の知識はあとから十分学べます。ぜひ好きなことをしながらコミュニケーション力やタスク管理力など基礎を伸ばすこと、何かに打ち込みやり遂げた経験を作っていってください。

Webディレクター、SNS運用オペレーター
**山岡　瑞穂**
（2021年度卒業生）

尾道市立大学日本文学科には、学生自らが新たな文学作品を創作し卒業制作として提出する〈文芸創作プログラム〉があります。

**4年次** 卒業制作指導

**3年次** 文芸創作特別演習

**2年次** 専門演習 日本文学系 / 専門演習 日本語学系 / 専門演習 文芸創作 / 専門演習 欧米文学系 / 専門演習 中国文学系

**1年次** 文芸創作入門

## 卒業制作のジャンル等

卒業制作では、主に小説の執筆に取り組む人が多いですが、戯曲を書いて上演したり、オーディオドラマの脚本を書いて制作したり、詩作と批評を組み合わせるなど、形式も様々です。ジャンルもミステリー、SF、ファンタジー、歴史小説、時代小説など多岐にわたり、複数のジャンルを横断するような形でライトノベル要素の強い小説を書き上げる人もいれば、いずれかのジャンルに単純には分類することのできない複雑なモチーフ・テーマを取り上げる人もいます。

## 文芸創作を志望する人たちの取り組み

4年次　文芸創作ゼミでの卒業制作……
小説を始め、詩・脚本などジャンルを問わないあらゆる文芸作品に取り組むことができます。4年間の研究と創作活動の集大成となるよう、3年次のゼミでの研究を活かして創作を行います。

成績とポートフォリオを踏まえての選考（希望者が11名以上の場合）……
3年次末までのGPAと学修記録・読書記録が選考の基準となります。自分が何に取り組み、その結果どのような学びを得たのかを記録しておく必要があります。

3年次　各ゼミに所属……
ここで学んだことが4年次の創作の基礎となります。私が近現代文学ゼミで行ったのは、伊坂幸太郎作品の「殺し屋シリーズ」における登場人物の魅力的な描き方についての研究です。インタビュー、随筆、書評、関係書籍から作者の描きたい善悪の基準を探り、登場人物の相関関係を整理して分析しました。名前と人物の結び付け、リスクと悪意の有無による悪人と悪役の差別化、親しみやすさと信念の3つによって悪役との差を明確にして、共感あるいは好感を抱かせているとまとめ、人物造形のコツを掴みました。

2年次　文芸創作専門演習・その他の専門演習（中国・日本語学・日本文学・欧米系）一つ以上を履修……
3年次末の選考に漏れた場合は文芸創作以外にとっていた専門演習のゼミに引き続き所属します。3年次でゼミに所属しながらの専門演習の履修も可能なため、複数取っておくことをお勧めします。

1年次　文芸創作入門ⅠもしくはⅡ……
「全ての芸術は模倣から始まる」ことを理解するため、作品のパロディを通して表現技術を高めます。小説や詩歌のみでなく、説明書や歴史記述、雑誌などの文体を模写しました。これらの文体は演出によっては作品内に登場させる必要もある他、1人称と3人称両方の視点での描写練習にもなるため、授業を通して創作の基礎を身につけられます。

日本文学科4年
**大下　和音**

# 日　本　語　学

日本語学（現代語）
教授
**灰谷　謙二**

日本語学の現代語分野を担当しています。方言研究が主たる分野になりますので、授業でも、音声言語を扱う内容で、今の私たちの生活の中の話し言葉にかかわる現象を扱うことが多くなります。音声言語は、文献資料をあつかう分野と違い、自分が観点をさだめて、まだ資料になっていない音声を形のあるものに定着させ、研究可能なかたちに文字化していく作業がはいります。だれも気付いていないこと、だれもその資料をもっていないものを対象に自分の立てた課題を解決していく面白さがあります。現場にいって自分の目や耳で体験した資料を直接得るフィールドワークという手法をとるという点も大きな特徴です。

日本語学（古典語）
准教授
**藤本　真理子**

難しい物事を考えるときも、自分の気持ちを考えるときも、言葉を用います。

言葉は、遠い昔と今を、外国（世界?）とここを、誰か（隣の人?）と自分とをつなぐ乗り物のようです。また、何かを考える始めの一歩となる存在とも言えそうです。

そんな言葉のことを、“ことば”で考えて伝えていきたいと思っています。皆さんも一緒に考えてみませんか。

日本語学（言語学）
講師
**髙島　彬**

なぜ世界には多くの言語があるのか。なぜ「ことば」は世界に1つではいけないのか...

私が専門とする認知言語学では、「ことば」にはその「ことば」を話す人たちの思考や世界の捉え方を色濃く反映されていると考えます。世界には約7,000の「ことば」があると言われていますが、その「ことば」の数だけ世界の認識の仕方があるのです。言語学の面白さは、日常の「ことば」が不思議に思えるような、ささいな発見や気づきにあります。人間のみがもつ「ことば」の面白さや不思議さに気づき、「ことば」の研究を通して人間とは何かという大きな問いについて深く考えていくのも人生を豊かにする方法の一つだと思います。



## 学生対談：日本語学って？ どう？

3年生 森広 和心さん

**Q：高校の国語と大学の日本語学につながりは？**

**髙島：**高校で勉強した国語と大学での授業、学修は何かつながりはありますか？

**森広：**高校は、ここからここまでを勉強しなさいという部分が強く感じられたけど、大学に行ったら、大学もある程度はやっぱり卒業に必要な単位というのがある。けれど、なにかやっぱり興味のあることを一つ持っていたら、どの授業に行ってもどこか関連づけて…あまり興味のなかった時代のことも、自分の興味のあることと関連づけて広げていける。ちょっとでも興味あるなと思って取り組めば、どの授業でもそういう思考になれて楽しいと思います。

**原：**大学では、自分で課題が設定できないといけないというのが大きいと思います。課題が設定できるぐらいまで知っていかないといけないのが大きいです。学期の後半までいろいろ思いを巡らせて、気になるものを見つけて、テストの論述でもレポートでも、自分の疑問を見つけていくという感じです。

**Q：ゼミや演習はどんな雰囲気？**

**髙島：**ゼミとか専門演習の様子は？

**原：**少人数だったんで、あまり緊張しないで、何でも話せる雰囲気。ゼミや演習だと座学とは違って、他の人の発表からの気づくことも自分の研究に活かせたりします。

**森広：**後期の演習では、文末詞に関わることで何か見つけて発表しようみたいな感じ。同じ文末詞って（テーマが）決められてても、みんな誰も（発表内容が）被らなかった。問題と思ってなかったところから、その人の発表を聞いてヒントを得て、自分の発表につなげていたりとか。

**髙島：**ゼミを選んだ、もしくはその領域を学びたいと思ったきっかけは？

**森広：**一番最初に気になったのは、テレビに出た人が、すごいわざとらしく方言を使っていて、方言がそういう演出の要素になるなと思って。自分は何気なくしゃべっているけれど、違う地域の人から見たらその言葉が演出になったりというのがおもしろいと思って、方言を。自分の生活の中での自分の気づきから文献を調べて、みたいな感じで。

**原：**私は逆にあの普段の生活だと、気づきにくいなと思うので。文学の知識があって、そのテキストを知ってる上で、初めてその日本語学の知識が活かせるような感じがするので。どこから触っていいかわからないってなりそうなので、対象を文学作品から始める日本語学の古典語の分野が、私はそれがやりやすかった。

4年生 原 優花さん

## いかがですか？ 灰谷謙二先生！

原さんも森広さんも、ことばの生活・コミュニケーションのなかでの小さな違和感や気づきがスタートになって、つきつめて考えてみることの面白さを体験されているところがいいですね。原さんは、もともとあった演劇への関心・興味が大学の授業の日本語史と結びついた、いい課題展開です。森広さんはドラマの方言への違和感が方言を見つめ直す意識につながって方言研究に興味をもったという、これもよい学問との出会いがありました。高校での国語の学びと大学の日本語学との関係や、文学と日本語学の補完的な広がりに触れていました。いろんなものが「語学的に考える」という思考方法のなかで関連づけられていく、その学ぶことの意味や面白さ、楽しさが伝わってきますね。

# 古典文学

中古文学
教授
**宮谷　聡美**

私は平安前期の一時期に生み出された「歌物語」に興味を持っています。『伊勢物語』は短い作品ですが、日本や中国のさまざまな作品がふまえられています。そして『伊勢物語』もまた、後世の文化に大きな影響を与え続けてきました。

講義では『伊勢物語』『源氏物語』や文学史、演習では『古今和歌集』『枕草子』などを取り上げ、日本文化の伝統と、現代に通じる価値観について考えます。

『学びを深めるヒントシリーズ　伊勢物語』（2018年）
『学びを深めるヒントシリーズ　枕草子』（2020年）
早稲田久喜の会編著　明治書院

中世文学
教授
**藤川　功和**

**華**やかな平安文学や、**エンタメ**感満載の近世文学に挟まれて、地味な印象が拭えない**中世文学**ですが、『平家物語』『方丈記』『徒然草』等、教科書のテッパン教材は氷山の**一角**で、多種多様な作品がまだまだ沢山あります。

また、個人的には、中世に生み出された作品が、その**後**どう読み継がれたのかについても興味があります。

例えば、江戸時代に多数出版された**『百人一首』**関連の書籍の中には、絵入り本も数多くあり、当時の読者はもとより今でも**マニア**を楽しませています。

例えば、左頁の挿**絵**は、『百人一首』のどの和**歌**についてのものなのか、おわかりでしょうか？

尾道市立大学附属図書館蔵
『百人一首図絵』より

**正解はコチラ！**

近世文学
講師
**吉田　宰**

日本近世文学とは江戸時代の文学のことで、私は近世中期（1700年代頃）の文学を中心に研究しています。とくに当時の文学が同時代の思想や自然科学と、どのように関わり合っているのかという点に興味があります。また、近世中期における本屋の出版活動についても調査を行なっています。

近世文学を通して様々な物事を多角的に捉えることは、現代において「当たり前」と認識している枠組みを相対化し、改めて考え直すよい機会となります。既存の枠組みにとらわれず、自らの関心がおもむくまま、ぜひ一緒に学びを深めてみませんか。

平賀源内『根南志具佐』に載るカッパ図
国文学研究資料館蔵本
（CC BY-SA 4.0、「国書データベース」より）
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200004190/viewer/73

※エレキテルを復元したことで知られる平賀源内ですが、彼の本業は本草学者（今でいう薬学者や博物学者）です。彼が執筆した小説『根南志具佐』には左図のカッパが登場するのですが、実はこのカッパ図には本草学者源内による〈ある仕掛け〉が施されています。その仕掛けとは一体何でしょうか。

# 近　現
## 明治　大正

教授
柴　市郎

私の専門領域は日本近代文学です。明治時代から昭和期までの文学を主要な研究対象としています。作家で言えば、夏目漱石や小林秀雄といった文学者たちが対象です。さらに現在は、映画など活字メディア以外の分野についても考察しています。

近年、文学研究の世界は多様化し、学会の研究誌にも、アニメーションなどのサブ・カルチャーや映画に関する研究論文が掲載される時代になりました。

こうした新たな文学研究の動向にも配慮し、多様なジャンルの表現にも視野を広げてもらえるよう、講義・演習をおこなっています。

### 【コラム】〈聖地〉おのみち

「小説の神様」と称される志賀直哉唯一の長編作品『暗夜行路』は、志賀の尾道居住時代に構想が練られました。また「海が見えた、海が見える。五年ぶりに見る尾道の海は懐かしい」は、少女時代を尾道で過ごした林芙美子の自伝的小説『放浪記』の著名な一節です。

大林宣彦監督の尾道映画三部作をはじめ、近年ではアニメ「ぽんのみち」「蒼穹のファフナー」「かみちゅ！」等の作品舞台ともなっています。

どうやら尾道には、描きたくなる〈何か〉があるようです。

# 代　文　学
## 昭和　平成　令和

教授
原　卓史

【研究対象】　坂口安吾・太宰治など／歴史時代小説／カストリ雑誌

【著書＆編集協力】　『坂口安吾　歴史を探偵すること』（双文社出版　2013年）

【ゼミ風景】　人数：12名。
卒業論文のテーマ：江戸川乱歩、太宰治、谷崎潤一郎など

【授業】　前期：「日本の文学」、「日本文学史」、「近現代文学専門演習」、「卒業論文（構想・準備）」
後期：「日本文学講読」、「日本文学講義」、「近現代文学専門演習」、「卒業論文（制作）」

### 近現代文学の授業を履修して　授業名：日本文学講読Ⅴ（原卓史先生）

私がこの授業を履修した理由は、近現代文学に関する研究の基本的な進め方や、作品を研究していく際に必要となる考え方を学ぶためでした。近現代に分類される日本文学に興味があり、専門演習やゼミで研究をしていきたいと考えていたため、その基礎になると考えて履修しました。

半期の授業を通して、作品を研究する際には、作品を一つの視点ではなく「様々な視点」から見つめることが必要であることを学びました。作品に対して新たな解釈を示していくためには、様々な観点や文学理論を複合的に用いることが求められるのだと分かりました。また、同じく原先生の担当される「近現代文学専門演習Ⅰ」では、作品に対し自分で深く考えていく必要があり、その際に「どの視点から注目していくか」を検討する手掛かりを得ることもできました。

授業内で特に印象に残っているのは、先生が学生のコメントを読んで「このような考え方もあるのだと思った」と仰っていたことです。今回の授業で取り扱った作品に対し、学生だけでなく先生とも一緒に向き合っているという感じがして、作品を分析していくのがより楽しく感じられました。

近現代文学の面白い所は、「作者」と「作品そのもの」という二つの大きな見方があり、二つを合わせて考えることも可能な点だと思います。作者がどんな人生を過ごし、作品にどう影響しているのか。作品を作品内だけでどのように分析できるのか。多角的な視点を通して考えるがゆえの「解釈の幅の広さ」が魅力の一つだと思います。

日本文学科３年
金藤　花林

# 中国文学

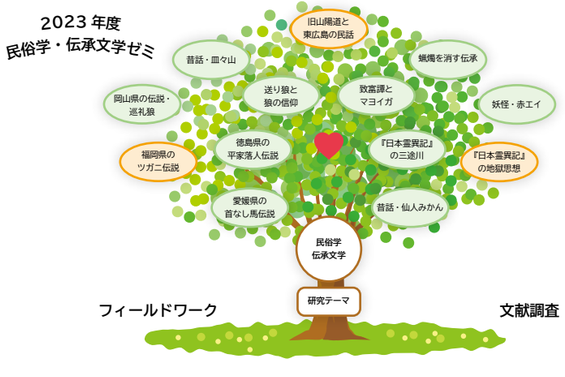
教授
鷹橋　明久

現代の日本は欧米文化の影響を受けながらも、長い歴史の中で中国文化の影響を受け続けてきました。この歴史的背景から、中国の伝統文化は日本文化の基盤に深く根付き、現代の日本人にも無意識のうちに影響を与えています。私は、中国の古典文化に触れることで、日本人の本質に潜む古い価値観を呼び覚まし、その素晴らしさを再発見していきたいと考えています。古典文化は私たちの文化的アイデンティティを形作る重要な要素であり、その理解は現代社会における自己認識や他者理解にも深く関わってきます。現代社会においては、古典文化が持つ知恵や美意識が見失われつつありますが、私は皆さんと共にその尊さを再認識し、新たな視点から古典文化を再評価していきたいと考えています。古典文化を通じて、私たちは過去からの教訓を学び、現代社会における課題や可能性に対処するための知恵を得ることができます。私は、皆さんと共に古典文化の探求を通じて、新たな発見や理解を深め、より豊かな人間性と文化的理解を育んでいきたいと思っています。

# 民俗学・伝承文学

教授
藤井　佐美

文学と民俗学の交わりに注目しながら、日本の伝承文化を研究しています。個人的には昔のお坊さんがお説教に取り入れた昔話や伝説、口伝の世界を研究対象とし、地域の民俗調査も進めています。まったく別世界に思われる分野が自然に結びついたとき、日本文化の奥深さを実感すると同時に伝承の世界が少しずつ身近になります。ゼミには好奇心旺盛な学生たちが集まり、バラエティに富む調査・研究を楽しんでいます。



# 国語教育学

准教授
山田　和大

「国語教育学」と聞いて、高校生までに授業を受けてきた経験から、なんとなく読み書きの力を高める方法を考える学問というイメージがあるかもしれません。確かにそれは間違いではありません。しかし、「国語教育学」の射程はもっと広く、国語科における教育の方法、読む・書く・話す・聞くという行為のメカニズムの解明、そもそも「国語」とは何かということを考える、など、扱う対象が多岐にわたります。つまり、子供たちの「言葉の力」を高めることに関することであれば、なんでも扱う学問であるということができます。多様な領域を扱うがゆえに他の学問領域を意識しながら＝多様な人々と関わりながら、研究を進めていくことになります。

私自身は、「国語教育学」のうち、文学研究と子供たちの「言葉の力」の成長とをつなぐ側面に重点を置いて研究しています。多様な人と関わりながら、子供たちの「言葉の力」を高めていくことのできる人材を育てていきたいと思っています。

## 【コラム】おのみち　をちこち

「大日本史」の編纂で知られる広島ゆかりの江戸時代の儒者、頼山陽（らいさんよう）は、尾道を訪れた際の七言律詩で、「山紫水明指顧に在り」と千光寺から見た尾道の眺望を讃えています。明治時代に尾道を訪れた思想家徳富蘇峰は、嘗て同地を訪れた先人山陽への讃を、自身の漢詩に「海色山光信に美なるかな　更に懐う頼子の出群の才を」と詠じました。それら文人墨客が詠じた尾道ゆかりの詩歌達は、現在千光寺へと至る「文学のこみち」の自然石に刻まれています。

一方、尾道には伝承も多く見え、菅原道真の腰掛け石や百島（ももしま）の平家落人伝承、向島の和泉式部伝承はその一端です。向島には源平の争乱で敗死した木曽義仲の遺児らが一時身を寄せ、開墾などに尽力した偉功を後に讃える覚明神社等も見えます。〈文学の街〉は〈伝承の街〉でもあるようです。

# 欧米文学

教授
**小畑　拓也**

20世紀中頃以降のアメリカのSF（science fiction/speculative fiction）の研究を出発点として、文化研究（cultural studies）の立場から、娯楽として消費されるステレオタイプ化したイメージ（ロボット、異星人、モンスターなど）の分析・再解釈を通じて、差別／排除を正当化しようとする「毒になる物語」への解毒剤を提供することを目指して、試行錯誤を続けています。

「欧米文学概論」・「欧米文学講義」・「比較文学」の講義科目では、「文学」との関わり方を「趣味・消費」から「研究・再生産」へと切り替えてゆく上で必要となる、専門用語の提示・解説に注力しています。演習科目の「欧米文学専門演習」では、情報収集と分析の訓練を外国語資料の読解を通じて積んでもらうことにしています。

# 英　語

教授
**高垣　俊之**

私は主に2・3年生を対象に英語を教えています。学生の皆さんの中には、大学に入ってからも英語を勉強しなければならないのかと溜息をつく人がいるかもしれません。しかし、洋の東西を問わず、有名な作家や知識人の多くは外国語学習あるいは外国生活を通して言語観や表現技能を高めていったと思われる節があります。皆さんにも意欲的に英語と格闘してもらい、母語と外国語の言語能力に磨きをかけてもらいたいと願っています。

研究面では、英語の習得と使用に関する諸問題をマルチリンガリズムの枠組みの中で考えています。研究成果としては以下のようなものがあります。

- 『新装版：カナダの継承語教育―多文化・多言語主義をめざして』（2020）共訳．明石書店
- 『英語デトックス―世界は英語だけじゃない』（2016）分担執筆．くろしお出版
- 『英語の習得と使用―バイリンガリズムの視点から』（2014）単著．渓水社

教授
**平山　直樹**

私の専門分野は英語学で、15世紀イギリスの名家であるパストン家の人々が書いた日常の手紙や法的文書などの英語を研究しています。書き手が自分の考えを表す時に使うI think や、相手にお願いする時に使うI pray you が、文の最初、内部、文末で使われる場合に、それぞれどのような意味を持っているかを明らかにするために、手紙の送り手と受け手の社会的な関係や、日常の手紙なのか契約書なのかという文書の形式の違いなどに着目して調べてきました。

授業は教養教育科目の英語を担当しています。TOEIC 対策の授業ではテスト対策をするだけでなく、ビジネスや日常の場面で使う英語の基礎力を身につけることを目指します。また、読解演習を中心とした授業では、文構造や談話構造、更には英語と日本語の事態に対する認知方法の違いにも留意して解釈をする練習を繰り返します。これにより、辞書と読解方略を組み合わせて英文を正しく読み、授業後も自己学習を進められる力を身につけることを目指します。

14-15 世紀にパストン家所有の家があったと言われている、英国ノリッジのエルムヒル

# 尾道を読む

おのみち文化スタディでは新入生と教員が一緒になって、尾道の街中を散策したり、街歩きで体験したことを後日発表したりして、尾道の文化を学びつつ、新入生同士の交流や教員との親睦を図っています。また上級生の中から有志を募り、教員と協力しながら企画・運営にあたっています。

2023年度は5月13日（土）に尾道散策、6月8日（木）に発表会を実施しました。尾道散策の日はあいにくの雨でしたが、全体を6つのグループに分け、レストランで食事を楽しんだり、招き猫の絵つけ体験をしたりなど、有意義な時間を過ごしました。また発表会の日は、スライド資料を用いてグループごとに10分程度の発表を行い、尾道についての学びを深め、発表会後には無料配布した豪華な弁当を各自堪能しました。

学生からは、尾道のことを知るよい機会となった、親交を深められてよかったという感想が多く寄せられました。

5月13日実施の尾道散策の様子
（千光寺頂上展望台）

5月13日実施の尾道散策の様子
（招き猫の絵つけ体験）

5月13日実施の尾道散策の様子
（おのみち映画資料館）

6月8日実施の発表会の様子
（グループ発表）



# フィールドワーク

中村智沙さん撮影
今治市吉海町　亀の遺骸（海亀の霊）

教員引率型フィールドワーク　光明寺にて

水田文菜さん撮影　因島水軍まつり（海まつり）の様子

日本文学科専門教育科目の一つで、3年次以降に履修する科目です。授業の目的は、日本文学研究と文芸創作に結びつく実地踏査をおこない、机上の学習では得られない資料収集や調査研究能力を養うことです。また、事前学修と事後学修をとおして、企画立案能力と報告能力を身につけながら、歴史学・民俗学・日本語学および日本文学等の点からも広く日本文化について学ぶこともねらいとしています。

授業では例年、2泊3日で教員引率型の実地踏査をおこなっていましたが、新型コロナウィルス感染防止期間中は集団での実習は中止となっていました。しかし、2023年度はコロナ5類移行という時期を迎えたことからも無理のない日帰りの集団踏査を計画し、瀬戸内村上海賊をめぐる歴史・文化をテーマに掲げた学修プログラムを展開しました。また、履修者は事前学修を踏まえ、単独で実施したフィールドワークの成果発表をおこない、報告書を『尾道文学談話会会報』第14号にまとめました。

# 尾道文学談話会

尾道文学談話会会報　第14号表紙デザイン
美術学科4年　永山つかさ

日本文学科を中心とする本学の教員が文学や言葉にかかわるさまざまな話題を提供し、地域の方々と大学の外で語り合う形式の公開講座です。ここでの成果は毎年『尾道文学談話会会報』にまとめられており、会誌の内容はインターネットでもご覧いただけます。

会報第14号はこちら

**2024年度・尾道文学談話会（全6回）**

第１回　『紫式部物語・和泉式部物語』の平安異聞を楽しむ
藤井　佐美（日本文学科教授）

第２回　赤神諒『空貝―村上水軍の神姫』の魅力について
原　卓史（日本文学科教授）

第３回　橋本竹下「禽虫絶句二十七首」について
鷹橋　明久（日本文学科教授）

第４回　江戸の本づくり
―十返舎一九『的中地本問屋』を読む―
吉田　幸（日本文学科講師）

第５回　歌謡曲（ウタ）から読み解く日本語
藤本　真理子（日本文学科准教授）

第６回　中世英語（1100年～1500年）に見る口語表現
平山　直樹（日本文学科教授）



## 虚構研究会

虚構研究会

虚構研究会は人文学・芸術分野の様々な事象について情報共有・意見交換を行う場です。文字を媒体とした文学ジャンルはもちろん、視覚映像・音声・空間、さらにはそれらが複合するものも含めたあらゆるメディア上の虚構・物語・表現を、研究・考察の対象にしています。

これまでに、参加者が推薦するマンガや小説を取り上げた読書会、海外アニメや映画を分析的に見るための鑑賞会、特定のビデオゲームについて考察する討論会、好きな楽曲を挙げて音楽的な視野を広げてゆく会、ジャンルを問わず自分自身が影響を受けたものについてゆるゆると語り合う会などを行ってきました。

人間が認識している世界（現実）は、人間が五感を通して得た情報をすべて人間に把握可能な形に再構成し、書き直した「虚構」です。私たちを取り巻く「現実」という「虚構」を一緒に読み解いてゆきましょう。（小畑 拓也 研究室）

## 高橋新太郎文庫

近代文学研究者、学習院女子大学元教授・高橋新太郎氏（昭和７～平成15）は、貴重な資料を含む膨大な蔵書を残されました。現在、日本文学科では、資料の整理、資料の展示会開催、データベース化作業に取り組んでいます。

2023年に開催された「おのみち文学三昧」での展示

## 伝承文化研究会

大学周辺のお祭り

村上海賊ミュージアム
特別展示の様子

日本の様々な伝承世界について、文献調査やフィールドワークから研究しています。祭を追いかけたり縁起物を探したり、民話の採訪、古文書の活字化やデータベース化なども進めながら、後世に伝える方法を模索中です。くずし字から読み解いた『ばけ物三十六歌仙』の研究成果は、所蔵される村上海賊ミュージアムの特別展示に結びつきました。『尾道文学談話会会報』第12号に掲載し、インターネット上にも公開しているのでぜひご覧下さい。これからも日本の多様な文化を楽しみながら伝えていきます。（藤井 佐美 研究室）

研究発表＋公開講演会

## 第15回（2023年12月9日）

# おのみち文学三昧

尾道市立大学日本文学科・尾道市立大学日本文学会 共催

おのみち文学三昧は、学会と講演会のコラボによる文学イベントです。
2023年は15周年記念として、ビブリオバトルと作家の三川みりさんをお招きしての講演会を催しました。
おのみち文学三昧は、これからも様々な切り口で文学の可能性を探ってゆきます。

## プレミアム（2023年11月3日）

対談＋ビブリオバトル

# 尾道市立大学日本文学会

尾道市立大学日本文学会は、日本文学科所属の教員と学生を中心として、研究発表や学会誌発行などの活動を行っています。

時代劇や歴史漫画では古めかしい台詞が使われますね。そこで、江戸時代に書かれた時代浄瑠璃も古めかしく書かれていると仮定し、日本語史上の文法変化の一つ「二段活用の一段化」（例「上ぐ」→「上げる」）を古さの尺度にして調べてみました。その結果をまとめて発表するという貴重な機会がいただけて嬉しかったです。

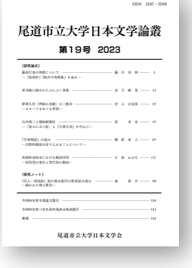
日本文学科４年　原　優花

文学三昧では正中二年七夕御会和歌懐紙についての発表を行いました。登壇して発表することはとても緊張しましたが、自分にとって良い経験になったと思います。発表を通して様々なご意見を頂き、今まで持っていたものとはまた違った新しい見方を持つきっかけにもなりました。

日本文学科４年　水田　文菜

文学三昧では、国語教育における「読み教材」から「書く活動」への活用についての研究発表を行いました。生徒たちが教科書の文章の表現の良さに気づき、日常生活のことや社会問題に対して、自分の意見を積極的に書いたり何か自分だけの作品を作ってみたりすることで国語の授業がもっと素晴らしいものになっていくと思います。

日本文学研究科２年
槇原　帝人




学会誌最新号

会報誌文学三昧号
（表紙デザイン
美術学科４年
林　里穂）

## 卒業論文の階梯（2023年度卒業生　村上日佳里さんの場合）

タイトル「夢野久作「押絵の奇蹟」の二都市―モチーフをめぐる考察―」

### 1．卒業論文の内容

― 夢野久作「押絵の奇蹟」の舞台となった都市に着目し、都市特有のモチーフの役割について考察しました。また、作品の典拠に目を向け、それらの意義を分析することで、夢野久作の作品史における「押絵の奇蹟」の位置づけを図っています。

### 2．完成までの学修の履歴

**1年生**

論文執筆への土台作りを意識して、本や論文を読み、知識を身につけるようにしていました。読んだものについては、要旨や疑問点などをノートにまとめていました。

**2年生**

専門演習で、論を発表し、質問に答え、修正するという流れを通して論文の書き方を学びました。卒業論文で書きたい題材についての情報収集もあわせて行いました。

**3年生**

文学三昧への登壇という目標を立て、ゼミナールで定期的に意見交換をしながら卒業論文の執筆を進めました。
また、私の卒業論文は都市を取り扱うものだったので、現地に赴いての調査を行いました。

**4年生**

完成までのスケジュールを意識して、やるべきことをリストアップして執筆に取り組んでいました。
また、様々な人に論文を読んでもらうことで、ブラッシュアップするよう心がけました。

### 3．日本文学を学ぶ意義

― 4年間の学びを終えた今、日本文学を学ぶとは、今を生きている自分とそれを取り巻く環境についての探求であったのだと感じています。自分自身と他者を見つめる様々な観点を養えることこそが日本文学を学ぶ意義だと思います。

学会誌に掲載された村上さんの論文はこちらからお読みいただけます。

本学学会で口頭発表

提出した卒業論文



## 2023年度卒業論文・卒業制作

| | |
|---|---|
| ●文芸創作領域 | 海行き譚<br>月の海<br>天使に連れ去られて<br>マコトニンギョウ<br>がんばれ！オカルト研究会パート2<br>三日前、ビスマスみたいな夢をみた<br>縁<br>あなたが昨日食べた一番美味しいもの<br>糸しき君を待つ<br>カーテンの向こうに<br>月をきれいに<br>世界終末記考<br>水の底 |
| ●日本近現代文学領域 | 【創作】「こちょうの夢」<br>【創作】「いのちの子」<br>吉田秋生『海街diary』論－吉田秋生作品における〈生〉と〈喪失〉－<br>辻村深月『かがみの孤城』論　－テキストとパラテクストの影響関係－<br>「宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論」<br>「江戸川乱歩「パノラマ島奇譚」論－メディアミックスにおけるひろがり－」<br>「太宰治「花火」論－来たるべき「幸福」のために－」<br>「村上春樹「納屋を焼く」論－同時存在とモラリティー－」<br>【創作】「巫病（創作）」<br>「石川淳「鷹」論－革命が生起する空間構造－」<br>「夢野久作「押絵の奇蹟」の二都市－モチーフをめぐる考察－」 |
| ●日本語学領域 | 国語教科書における『古事記』の文法的な側面からの教材化について<br>マンガ・アニメ作品に登場する「ワシ女性」の考察－『映像研には手を出すな！』の浅草みどりに注目して－<br>「～方（ほう）」の意味の拡張について－丁寧な意味が生じた理由の考察－<br>音声談話における文末補充と原因・理由節の後置についての研究<br>広告のキャッチコピーにおける企業キャッチフレーズの表現法に関する研究<br>首都圏周辺地域方言話者が用いる助動詞「ダ」の方言的性質についての研究－静岡県方言と広島県方言における方言使用意識の比較から－<br>長崎県壱岐市における動詞活用型の動態に関する研究<br>雑談会話における話題の展開に関する研究<br>【創作】『雑踏』<br>福岡県肥筑方言における言い切りの文末詞「バイ」「タイ」「ヤン」に関する研究 |
| ●国語教育学領域 | 中学校高等学校国語科における『聞くこと』の学習―教科書の学習活動の分析を中心に－<br>ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」学習指導の実際 |
| ●日本古典文学領域 | 『清少納言集』における清少納言詠和歌について<br>『狭衣物語』の女性の呼称－引き歌から見る心情と位置づけ－<br>古今和歌集恋歌の構造について－構造と配列から読み解く物語性と役割－<br>『とりかへばや物語』論－女主人公の特異性－<br>草双紙に描かれたぶんぶく茶釜<br>曲亭馬琴の勧善懲悪－『新編金瓶梅』における男性の悪人像－ |
| ●伝承文学領域 | 『日本霊異記』の冥界巡り譚－他界観・死生観の変容<br>東広島市西条町における民話の伝播と「宿場町」の役割－西条町のアイデンティティと民話の受容－<br>福岡県大牟田市の「ツガニ伝説」の研究 |
| ●中国文学領域 | 『荘子』内篇に見られる死生観について |